遠江・山と里の民俗
会報　第015号

無形民俗文化財への期待

文化財課長　鈴木一有

市内にある無形民俗文化財保存継承には様々な課題を抱えていますが、保存団体や地域・文化財愛好者などに支えられ、保存継承が進められていることに厚くお礼申し上げます。

市内の無形民俗文化財は、国指定2件・県指定5件・市指定4件・国選択四件・県選択三件を数えます。平成28年度からは、市内の文化財の裾野を広げる方策として「認定文化財」制度を設けました。

初生衣神社あんぞ祭り（認定文化財）写真は浜名惣社神明宮に唐櫃が入る

この制度は、地域の皆様からの推薦によって顕彰すべき文化財を募るものです。無形民俗文化財についても多くの推薦をいただき、令和元年度までに32件を認定いたしました。

潔斎料理（西浦田楽）

また、個別の祭礼や芸能も単体として捉えるのではなく、関連する複数の文化財についてストーリー性をもたせて把握し、広くその価値を示すことも重要です。地域に伝わる歴史的な建造物をはじめ、道具や衣装といった「有形民俗文化財」、行事を支える「文化財の保存技術」などとの複合化も今後重点的に取り組むべき課題であると認識しています。

今年度、文化財課では『文化財保存活用地域計画』の策定を進めています。この計画は、市内の歴史文化の特徴を整理し、文化財の保存と活用に関わる方針を示すとともに、今後の具体的な事業計画を定めるものです。無形民俗文化財につきましても、これまでの支援事業を継続するとともに、先ほどご紹介したような文化財群としての重要性の提案、方策などに触れていきたいと考えています。

学校との連携につきましては、令和2年3月に策定された第3次浜松市教育総合計画後期計画（はままつ人づくり未来プラン）において、今後、取り組みを進める施策の中に「市民団体と学校の連携による無形民俗文化財継承活動への支援」が明記されました。

この連携については、本課も関わり一層支援を進めていきます。子供たちによる文化財サポーター制度ともいえる取り組みは、全国的にもモデルとなる事業だと期待しています。

今年度は、新型コロナウィルスの感染拡大によって、祭礼や公演等を一時的に休止した団体も多いことかと思います。今後、感染の終息にはなお、一層の留意が必要ですが晴れて再開できますことを心より、祈念いたします。

清竜中学生による伝承（神澤のおくない）

「浜松の仮面」全集作成

市内には祭に使われる仮面が多数残されております。多くは信仰の対象として神聖に扱われていることが多いと思いますが、浜松の文化を理解する上で欠くことのできない取り組みになろうかと思います。

浜松認定遺産

初生衣神社　おんぞ祭

場所　浜松市北区三ケ日町
祭神　天棚機姫命（織物の神）
例祭　4月13日（土）14時

「おんぞ祭」は赤引きの糸を使い、初生衣神社の「織殿」で織った「御衣」を伊勢神宮へ献納する祭である。

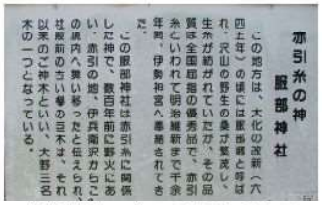
14時になると初生衣神社から浜名惣社神明宮まで、神官を先頭に「太一御用」の幟・唐櫃・奉納幟を持った人々が向かう。歩いて5分ぐらいだ。浜名惣社神明宮の摂社天棚織姫社（織物の神）に奉納してある「赤引きの糸で織った御衣」を唐櫃に移し、初生衣神社に戻る。唐櫃から「御衣」を本殿に奉納する神事が始まり優雅な浦安の舞や最後には餅投げで締める。参加者には甘酒の接待や無地の布の進呈もある。

赤引きの糸を送ったとされる三河大野の関係者や「御衣」が次に送られる豊橋の湊町神明社の神官も参加して遠州織物発祥の地として、地元と織物業界の祭典となっている。

太一御用の幟を始め唐櫃の行列が続く

近くでは豊田佐吉が豊田織機を作った。世界のトヨタは初生衣神社の「織殿」から始まったかもしれない。

神御衣は初生衣神社の御衣祭が終ると、豊橋市湊町神明社へ送られ、5月14日に再度湊町神明社の盛大な御衣祭奉献の神事の後、渥美半島伊良湖港からフェリーボートで鳥羽港、そして伊勢神宮へ奉献される。なお伊良湖神社でもおんぞ祭りが行われる。


赤引糸の神　服部神社

この地方は、大化の改新（六四五年）の頃には蚕飼養と呼ばれ、沢山の野生の桑が繁茂し、生糸が納められていたが、その品質は全国屈指の優秀品で、赤引糸といわれて明治維新まで千余年間、伊勢神宮へ奉納されてきた。

この服部神社は赤引糸に関係した神で、数百年前に野火にあい、赤引の地、伊兵衛沢から二の渕内へ無い移ったと伝えられ、社殿前の古い巻の三本は、それ以来のご神木といい、大野三名木の一つとなっている。

大野神社の内に服部神社あり

■赤引きの糸の旅

三河大野に赤引き温泉がある。その周辺からは上質な山まゆが取れたという。伊勢神宮に奉納されるという糸は赤引き温泉で身を清めた女工さんたちが糸を紡いだと伝えられている。

その糸は亀割峠を越えて三ヶ日の初生衣神社へ届けられた。織殿で御衣に仕立てられ、おんぞ祭りを終えて豊橋の湊神明社に送られた。

豊橋のおんぞ祭りは三ヶ日岡本から送られた唐櫃を神殿に奉納した後、女子がおんぞ歌「出処は岡本様よナ～おんぞ ヨイヨイ ヨイヨイ・・」を歌いながら踊る。その後、伊良湖に立ち寄り伊勢神宮に送られた。その名残で伊良湖神社でもおんぞ祭りが行われている

「おんぞ祭」は日送りの行事のように繋いでいった。

赤引き糸を受け取り「織殿」で織る

初生衣神社で織った御衣を一時奉納

伊良湖は、かつて伊勢の国に属していた

もと伊勢神領。西横が吉田湊

祭神　豊受姫神
養蚕の道を伝えたという神

祭神は萬幡姫命

西浦田楽に寄せる思い

西浦　森口哲夫

■観音様の里を離れて

思い起こせば、既に半世紀の昔になろうとしています。私は学校を卒業して信用金庫の水窪支店に勤務していましたが、25歳の時に鹿島支店に転勤になり、「観音様の里」西浦を離れることになりました。

それから定年を迎えるまでほとんど戻ることなく、遠く離れた天竜市（現天竜区）に居を定めての生活になりました。

私の家は代々西浦田楽の能衆を務めてきていましたが、元気だった父親任せ、それまで関わってきませんでした。

陽光に包まれた観音堂

ところがこうした状況におかれた私の立場に興味を持った某ＴＶ局の取材がきっかけで観音様の祭に深く関わることになりました。「西浦田楽～桃田地の継承～」というタイトルでの単独ドキュメントであったので、一子相伝で伝承されてきた祭事や芸能に関わる内容でした。この取材を機会に私の眼は一気に西浦に向けられるようになりました。

■桃田地の継承

「観音様の祭」は「能衆」と言われる能衆家で支えられてきました。我が家は能衆の中でも酒造りを取得する「公文衆」という役割を兼ねている家筋であることが初めて分かったのです。それから休みごとに実家に帰って、父親のとっくんを受けるようになりました。

特に、我が家「桃田地」が担当する「三番叟」には責任の重さを感じ、村の衆にも教えを請いました。こうしているうちに私はいつしか能衆の一員になっていました。心配しながら祭に向かう私に向かって父母は「間違ってもよい。観音様が守ってくれているよ。ご先祖様も守ってくれているよ」と励まして送ってくれました。「出体童子」「君の舞」「田楽舞」そして「三番叟」と舞い納めた時には足がボロボロになっていたように思いますが、観音様のご加護を感じ、何とも言えない爽快感に包まれていたことを今も覚えています。

母に励まされて出立

桃田地の継承書き

■通い能衆

日々の生活を共にして、ハレの祭に臨むのが本来の姿であり、山深い地での生活の知恵であったはずでした。しかし、次第に生活のために能衆も西浦を離れることが多くなっていきました。ここを離れても祭には帰ってきて能衆の役割を果たすいわゆる「通い能衆」も何軒か存在します。

こうした家は半世紀前まではまだまだ少なく「通い能衆」として祭の日だけ顔を見せるのは一種のうしろめたさを感じていました。しかし、30歳を過ぎたばかりであり、仕事に翻弄される日々ではありましたが、西浦住民としての自覚がつのってきました。

■公文衆の役割

能衆の役割の中に酒造りを奉仕する公文衆の中にあって我が家はそれを仕切る役を担ってきました。その仕法は長子に口伝で伝えられてきたようであるが、今は、その要旨が記録されています。残された三代前からの記録を見ると家の役割を守ろうとする先祖の思いが伝わってきて、身が引き締まるように思えます。

酒造りの桶

■西浦能衆として

生活のために居を移さなければならず、仕事の合間を縫って通い詰めた観音様の祭ではありましたが、西浦に住んでいる以上に西浦を理解できているのではないかと思うようになりました。それを認め、村の一員としてくれた別当を初めとする仲間に深く感謝しています。この経験を無駄にすることなく、村を離れて暮らす「能衆」の心を西浦につなぎとめる努力を通して恩返ししたいと思っています。

大天狗小天狗お出やれ

編集・浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会・発行 浜松市　電話〇五三-四五七-二四六六

滝沢おくないの村訪問記

柴田宏祐

滝沢おくないの村が今回、浜松市認定文化財となったのを記念して訪ねてみました。

疫病退散

「唐土の鳥が日本の国に渡らぬ先に　七草なづなでストトントン」と1月4日の滝沢おくないでまな板をたたきながら七草を刻むのが恒例となっています。渡り鳥が疫病を運んでくることが解明される以前からそのことに目を付けてきた営みが今も続いているのにはこの村が疫病と対峙してきた歴史が大きく影を落としています

滝沢のおくない　七草粥づくり　林慶寺

江戸時代、境を背に負う隣村で2回にわたって疫病が流行したといわれます。100戸余りあった隣村の人口は20戸足らずにまで激減してしまったので、村でその管理まですることになりました。この村まで疫病が蔓延したということは伝えられていませんが、回復した村との利権争いが大きくなり、訴訟問題で村は疲弊していったと言われています。

こんな村の記憶が滝沢おくないの中に色濃く残っていることを七草粥をすすりながら村の衆は語ってくれました。

もみ飯祭

滝沢おくないは幾つもの祭で構成されており、1月1日に四所神社と4日林慶寺で行われます。その中の一つ「もみ飯祭」は太い藤蔓を東の村と西の村で引きあってその年の豊作を占うのです。藤蔓の上では、お櫃に入ったご飯をもんで豊作を祈願しているのです。まさに、綱引きの原型を髣髴とさせてくれます。

もみ飯祭　村を切り開いた山下・渥美の末裔が祭りを仕切っている

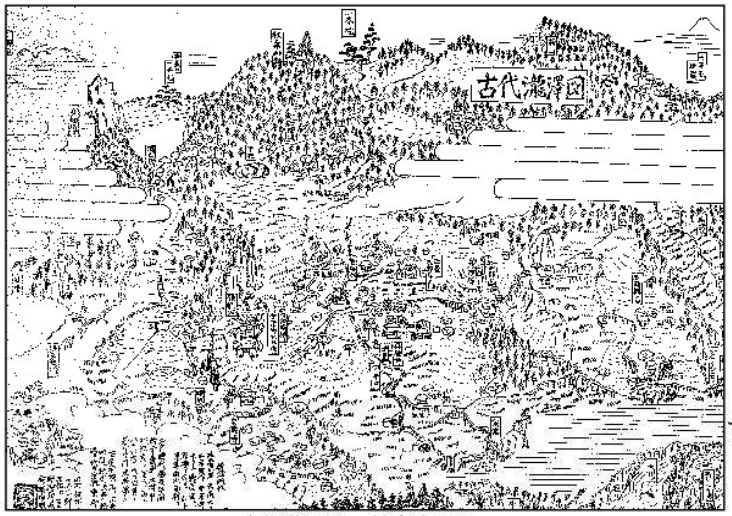
東の村と西の村

林慶寺から北を仰ぐと急斜面にへばりつくように分布する村が一幅の壁画を見るように目に入ってきます。これが文化的景観として市内で初めて認定された農村集落の景観なのです。

もみ飯祭として東西の村が並立するようになったのはこの村の開基と関わっているというのです。

今から六百年位昔の室町時代中頃、井伊谷の山下家から分家した山下六郎兵衛が従者の渥美五郎左衛門を引き連れて滝沢に居を構えたのが始まりだと伝えられています。このころ井伊家は一門を配下の谷々に配置して勢力を伸ばしていきました。そうした一環で滝沢へも配下の山下を派遣したのだと思われます。

村の真ん中を流れる沢を境に山下と渥美は居を構えて以来営々と村を切り開いてきました。両家は村の草切百姓としてあがめられ、村の治世を守ってきたのです。



古代瀧澤図　林慶寺にて

生活用水の水利を司るかのように両家は沢の上部に居を構え、一族がそれぞれに分布する中世さながらの村が残されたのです。

三方原合戦の前哨戦

1572（元亀3）年遠州侵攻途上の武田軍の将山縣は三方原合戦の前哨戦と言われる仏坂の合戦で勝ち名乗りをあげて、二俣城に向かう途上に滝沢に軍を進めてきたのです。

三岳山の中腹を超えて、坂を一気に下ってきた軍は安楽寺を焼き討ちし、戦闘を繰り返していったと伝えられています。

東の村の一画にこの戦いの戦死者と弓矢を葬った「矢塚」が残されています。戦国期の俤を留める五輪塔や宝篋印塔が幾つか残され、戦国期の雰囲気を伝えてくれています。